

佐々木愛「毎日のスケッチ」のオープニングパーティー
+ 日豪合同展「内在の風景」展のリリースパーティー

4月18日(日) 18時～ at gm ten

この度、gm ten にて開催している佐々木愛「毎日のスケッチ」という企画のオープニングと共同で、日本とオーストラリアの若手作家による合同展「内在の風景」展のリリースパーティーを行うこととなりました。

みなさまお誘い合わせの上、是非会場まで足をお運びください。

「内在の風景」は2008年暮れよりその計画がはじまり、レジデンス、展覧会、トークセッションなどを交えた複合的な日豪合同企画として、今年度はオーストラリアで、来年度は日本で、展開されます。参加作家は国内外で幅広く活躍する新進気鋭のオーストラリア、日本人作家の併せて8人です。今年の8月、メルボルンのアーティスト・ラン・オーガナイゼーションのウェストスペースで展覧会が開催されるのに先立ち、今回の告知イベントでは、開催に至った経緯を初め、参加作家の作品の紹介、企画の内容、メルボルンのアートスペース、日本とオーストラリアの今までの交流イベントなどに触れる予定です。

今回の企画において、風景とは、心の外と、中の、その両方を映し出すものです。オーストラリアの風景も日本の風景も見る者が同じなら、やはり繋がっている風景でしょうか。それぞれが自由に感じて表現する作品が、ひとつの場所で同時に展示されたら、それは全体として大きな一つの繋がっている風景を示唆するのでしょうか。それぞれの場にいるそれぞれの人の目に、それらはどう映るのでしょうか。世代や、文化や、人種を超えて共有できるような風景を求めて企画は進められてきました。どうぞ、皆様もご自身の抱く風景と一緒に展覧会をご覧ください。

進藤詩子 (アーティスト/内在の風景展オーガナイザー)

以下、今回の企画の参加アーティストです。

大西伸明

樹脂やアクリルペインティングを用いて精巧なフェイクを制作します。観る者をだます、というよりは、私たちの日常の景色が、繰り返し複製されるもので構成されていることを教えてくれ、そしてその一つ一つの微妙な違いを見抜く鋭い感覚を呼び覚まされるような、そんな気がします。

http://www.ma2gallery.com/artists/13/nobuakionishi_view.html

片桐功敦

みささぎ流の家元、華道家でいらしゃいます。命在る自然の心とご自身の心を通わせながら風景の奥深くに張り巡らせれる根から命を、例えば花卉のひとつをもって、すくい取るようにお花を生けられるように見受けられます。ポリウムたっぷり生けられた時等、その造形はまるで全体でひとつの生き物のような生命力をみなぎらせています。www.geocities.jp/mondeboooks/

元田久治

リトグラフや絵画で、よくしられた都市の風景が、廃墟となり、やがて再生をはじめ、そんな風景を描き出します。それは私たちの文明が常に何らかの力に寄って破壊されしかし再生する力を有していることを圧倒的な表現力とモノクロの画面を持って静かに訴えている様です。2009年秋より今春まで、オーストラリアで視察、製作を行っています。

佐々木愛さんは、2008年のウェリントンでのレジデンスに引き続き、メルボルンを拠点に南半球の風景を相手に、6月より滞在制作を行います。愛さんは「予言的な風景」をテーマに、原始の時代から変わらず伝えられてきた具象、ストーリーを取り入れたウォールドローイング、アーティストブックなどの作品を制作します。

ジェレミー・ベッカーベイカー

小さなオブジェを繰り返すつくり、重ね合わせることでインスタレーションを構成し、恰も、常に移り変わる現代都市に暮らす者の、心の風景の具現化を試みているかのようです。彼が消費する素材と時間への精神的な繋がりは、個人的とも共同的とも言える生きることへの情動的な関わりを反映しているようです。

キロン・ロビンソン

不/存在と死に挟まれた生きる者によって生み出された人工的想像物として「風景」を捉え、写真を媒介に環太平洋の文化の風景を表現します。過去にシンガポール、大阪、オーストラリア各都市で発表活動を行い、またギャラリースペースの運営、展覧会のキュレーション、教員活動など、アートコミュニティに深く関わり、活発に貢献してきました。今回の企画には、プロジェクトマネージャとしても参加しています。

ヘイミッシュ・カー

マーカーとペインティングを用いた 彼曰く、「凝り性で、言うならば、神経過敏なレンダリング」を用いた作品は、美術史における、死という運命や宗教的荘厳さを示唆するものとしての自然のイメージの描写、使用について、問いを投げかけます。恣意的にゆがめられたデジタル情報が、物体だけでなく、現在の文化に置かれている人間の存在をも、体現しているようにも見えます。

進藤詩子

2003年よりメルボルンに作家として拠点を置き、日本で自然と身に付けた世界観のようなものを、改めて見つめ直し、そこで新たに発見した風景を作品として表現してきました。次第に、同世代の日本の作家がオーストラリアにやってくる、一緒に展覧会を作ったら、そしてその逆を日本で行ったら、オーストラリアと日本の風景は、どのように作家に捉えられ、そこから何が表現されるのだろうか、と思うようになりました。キュレーター、コーディネーター、作家として、「内在の風景」展の企画を始動したのは、そんな経緯があったからです。www.ushindo.blogspot.com